

赤かぶ（秋播き秋冬穫り）

栽培暦

月	8	9	10	11	12
作型					
露地 秋播き 秋冬穫り					

栽培の特徴とポイント

生育適温は 15～20 で冷涼な気候を好み、高温と乾燥を避ける。高温下では色も出にくいので、盛夏の栽培は避ける。また、根こぶ病が発生しやすいのでアブラナ科の跡作としない。

品 種

飛騨紅カブ：加工向き。蕪の外表面は濃紅、肉色は純白。漬けると皮の紅色が染み出し美しく色付く。極（トーホク）めて耐寒性強く、生育旺盛な大型蕪で作りやすい。特有の香りを持つ。

あかくら：生食向き。根部の肌は、全面美しい鮮紅色の豊扁円球。肉質は、緻密で柔らかい。晩夏か（小林種苗）ら一般秋蒔き栽培では播種後約 45 日で中蕪となり、60 日前後で根径 12～13cm 位になる。

本ば管理

1 ほ場の選定

排水良好な日当たりの良いほ場で、アブラナ科野菜の連作とならないようほ場を選択する。適する土壌 pH は 5.5～7.0 の範囲。

2 耕起

土壌改良資材、基肥を播種の 5～7 日前までに散布し、深く耕起する。良質な堆肥があれば、基肥と同時に 10a 当り 2～3 t 施用すればさらに良い。畝幅 100～120cm を目安として畝立てを行い、できるだけ高畝とし、排水対策を徹底する。

3 施肥

施肥例（kg / 10 a）

肥料名	基 肥	追肥	成分量		
		本葉5～6枚	N	P	K
苦土石灰	100～120				
そさい3号	100		15	15	15
やさい燐加安S540	-	20	3	3	2
			18	18	17

4 播種

1) 播種時期 8月中旬～9月上旬

2) 播種方法 条間 25cm × 株間 15cm の 2 条千鳥播きとし、1カ所に 3～4 粒播種する。

畝幅 1.2m × 株間 15cm × 2条千鳥播き = 10,000 株/10a 種子量 30ml
1ヶ月以上継続して出荷する場合は、5～7日毎に3～4回にわけてまく。

5 間引き

本葉2～3枚時と本葉5～6枚時の2回間引きを行い、最終的に1株1本とする。変形葉や色の濃い生育旺盛な葉を持つ株を抜き取り、揃いを良くするよう努める。間引き時期が遅れないように注意する。また、9月下旬頃より変形したカブが散見され始めるので、葉の奇形、変色を示す株と同時に、ほ場を見回り直ちに抜き取り、ほ場の外に処分する。

6 追肥・かん水

本葉5～6枚時の間引きを行うと同時に条間に追肥する。生育後半に肥料を施用すると裂根が生じやすくなるため、適期に追肥を行う。

9月下旬から10月にかけての肥大期に極端な乾燥がみられた場合のみ、畑の乾燥状態をみて気温の低い夕方に適宜短時間のかん水を行う。かん水が停滞水となった場合、むしろ生育を阻害するので、事前に排水対策を施しておく。

7 収穫・調製

1) 収穫

根部直径7～8cmになった頃から仕向先に応じた出荷基準を目安に収穫する。形の出来上がったものは、以降の肥大が劣るため育ちの悪いものも収穫する。取り遅れるとスが入ったり、裂根する。

また、日中の収穫は肌が乾燥し洗浄作業が困難になるので朝夕収穫とする。

2) 調製

根についた土をよく洗い落とし、その後の水切りを完全にす。古葉、病葉、毛根は取り除き、サイズ別に揃える。

生食用の場合は葉を付けたまま、加工仕向出荷品は葉の部分を切り落とし丸玉の荷姿での出荷を要求される場合が多いので注意する。

病害虫防除

根こぶ病：発病を防ぐために、アブラナ科の連作を避ける、防除薬剤を施用する、土壌pHを上げる、排水の悪いほ場では高畝にする、抵抗性品種を用いる、収穫終了後、被害株をほ場外へ持ち出し焼却する。

べと病・さび病：低温、多湿で発生する。透光・通風が悪いと発生が助長されるため、予防的に銅剤を散布する。

ヨトウムシ、アオムシ、キスジノミハムシ、ダイコンサルハムシ：は種時に粒剤を散布するとともに、生育中の発生状況を観察しながら早めに防除する。

販売のポイント

品種や仕向先によって出荷規格基準が異なるため、出荷前に基準の設定・目揃いを行う。継続出荷に努める。